

今回は、弟子たちがどのようにイエスの生涯を捉え直し、原始キリスト教団を成立させていくかをみていきます。

## ✠ イエスの十字架上の死と復活 (8) イエスの復活と原始キリスト教団の成立

### 弟子たちの「復活のイエス」との出会い — 「エマオの物語」

夢破れ、失意の中にあった弟子たち。しかし彼らは、イエスの残酷な刑死の意味を問い続けていました。そんな中、彼らが「復活したイエスに出会った」という出来事が次々に起こったのです。その中から「エマオの物語」と言われる箇所を読みましょう。

二人の弟子にイエスが現れたという記事が『ルカ』24章に記されています。イエスの墓が開けられ、婦人たちが天使から「イエスは生きておられる」と知らされたその日、望みを砕かれた二人の弟子が、エマオ(エルサレムから西北西に60スタディオン=約11km離れた町)に向かっていました。おそらく自分たちの故郷へ帰ろうとしていたのでしょう。すると、『15話し合い論じ合っていると、イエス御自身が近づいて来て、一緒に歩きはじめられた』。

百瀬文晃先生はここに、私たちの人生における「イエスとの出会い」についてのメッセージがあるといます。それは、『私たちのほうでイエズスを探しているのではなく、むしろイエズスが、まるで失われた羊を探しに来る羊飼いのように、私たちを探しておられるということ、そして一緒に歩いてくださっている』というメッセージです。私たちが人生という旅の途上でつまずいたり、健康を害したりして希望を失い、苦しみ喘いでいるとき、イエスは私たちを「探し、近づいて来て、ともに歩いてくださる」ということです。イエスの方から私たちのところへ来てくださるのです。私たちは弟子たちのように、予想もしなかったところでイエスに出会うのです。

では私たちは、イエスが来られるのをじっと待っていればいいのでしょうか。

夏期神学講習会で何度かお話を聞く機会を得た山岡三治先生(上智大学神学部教授)は、信仰生活とは『このエマオの二人のような、主を認める旅路である』とされ、このような出会いをするには、『神の言葉による生活の再読』が必要で、『自分の生活を神の言葉に照らして真剣に生きない人は復活のキリストを認めることはでき』ないと書いておられます。神さまの言葉に導かれながら真剣に生きる…。簡単ではないですね。私たちは「もっとよく生きたい」と思いながらも、パウロが書いているように『自分がしていることが分かりません。自分が望むことは実行せず、かえって憎んでいることをする』(『ローマの信徒への手紙』7.11)のが常なのではないでしょうか。パウロはこの焦燥感と絶望の中で、新しい「救いの可能性」を学んでいきます。(この話は今回の主題とすこし離れますので、後日ご紹介します。)

イエスに出会う「そのとき」は誰にもわかりません。まさに『願って、願って、願い続けろ。そうすれば、手に入る』(『マタイ』7.7~8 山浦訳) 出来事なのでしょう。

話をもどします。二人の弟子は一緒に歩いていても、彼がイエスだとは気がつきません。イエスは「何を話しているのか」と聞きます。クレオパという弟子がイエスの刑死と婦人たちが墓に行ったが遺体を見つけられなかったこと、そしてイエスが復活されたことを告げる天使の言葉を伝えます。つづきを新約聖書翻訳委員会訳の『新約聖書』(佐藤研・訳)に『山浦訳』の補足([ ]内に丸ゴシ

ック体で表示)を加えたもので読んでみましょう。

.....  
25 「ああ、頭の悪い、心の鈍い者らよ、預言者たちの語ったすべてのことを信じられぬとは。 26 キリストは必ずやこれらの苦しみを受けて[こそ]、彼の栄光に入って行く[誉れと喜びに輝く]ことになっていたのではなかったか。」 27 そこでモーセおよびすべての預言者から始まって、全聖書の中で自分自身について書いてあることを彼らに詳しく解き明かした。

.....  
二人はイエスが復活したことについて半信半疑だったのでしょう。イエスはその話を聞いて、なんと物分りの悪い人たちだろうと思い、「お助けさま(イエス)はあの苦しみをすべて身に受けて、誉れと喜びに輝くはずではござらなただかな？」(山浦訳)と語りかけます。そしてそのあと、聖書(現在の『旧約聖書』の部分)全体にわたって自分について書いてある事からの意味を懇切丁寧に説明なされたとあります。その死と復活に関しては、メシアは「神の永遠の計画によって必ず苦しみを受け、それから栄光に入る」と『聖書』のなかで証言されていることをイエスは弟子たちに説いたのです。

後半を『山浦訳 聖書』で読んでみましょう。二人の弟子とイエスはエマオの町に近づきました。イエスはなおも歩き続けようとしませんが、弟子たちはもっと話を聞きたいので、日も暮れてきたので一緒に泊りませんかと無理に引き留めます。

.....  
29 そこで、イエシューさまも弟子たちといっしょに泊まろうと、宿に入って来なされた。  
30 さて、そうして、弟子たちとともに夕餉のお膳に着いたとき、イエシューさまはパンを取って、神さまのすばらしさを讃えまつり、裂いて、それをその人たちに分けておやりになった。  
31 そのとき、弟子たちの目がパッと明いたようになって、そのお方がイエシューさまだったということがわかったのでござる。その途端、イエシューさまのお姿は、[掻き消す如くに]見えなくなってござる。 32 弟子たちは [しばし夢を見たるが如き心地にありしが、ハッと我に返り] 互いにこう言い合ったものでござった。「あのお方が道で話しよーちゃった [話をしていた] とき、尊き書き物の事をみやすうに [わかりやすく] 語ってくれちゃったとき [語ってくださったとき]、わしらの心は火のように燃えちよったいや [燃えていたよ]！」 33 弟子たちはすぐさま腰を上げ、そのままそこを発ち、イエルサレムに走り帰った。戻って見れば、十一人衆とその仲間たちが集まっていて、 34 このようなことを言っていたのでござった。「旦那が本当に亦 生き返らせていただいて、シモンに姿を見せやったぞ！」 35 そこで、その人たちも街道での出来事だの、イエシューさまがこの人たちにパンを裂いてくださったときにどんな次第でそれがイエシューさまとわかったかということだのを語って聞かせたのでござった。

.....  
イエスがパンを裂いて弟子たちに与えた瞬間、『弟子たちの目がパッと明いたようになって、そのお方がイエシューさまだったということがわかった』のです。でもその途端、イエスの姿は見えなくなってしまいました。しかし二人には、旅の途上でお会いしたのは正真正銘の「イエスさま」であったことがやっとわかったのです。

ここに『エマオの物語』のもう一つのメッセージがあると百瀬先生は指摘されます。イエスがパンを裂いたとき、『そのお方』がイエスであることがわかった。つまり、『イエスがくださる糧(パン)は、新しい光、新しい力となる』(百瀬先生)というメッセージです。これは教会の〈ミサ〉の意味そのものです。カトリック教会で行われるミサでは、最初に聖書が朗読されます。これはエマオ

への途上でイエスが弟子たちに聖書を説いた部分にあたります。次に、パンとぶどう酒で〈主の晩餐<sup>ばんさん</sup>〉が祝われます。これは弟子たちがイエスとともに食卓についた部分にあたります。聖書(神のことば)と聖体<sup>せいたい</sup>(パン<sup>④</sup>)の『両方を通じて、復活者イエスは私たちとともにおられ』る(百瀬先生)のです。

【④】聖体：カトリック教会の用語で、ミサで聖別されたパンのこと。その状態の中に復活の主キリストが現在すると信じられ、司祭が「キリストの御<sup>おん</sup>体」と唱えて信者に渡します。

二人の弟子は「もっと話が聞きたかったので」イエスと一緒に泊まってほしいと言いました。『もし彼らがイエスを招かなかったら何も起こらなかった』と、山岡先生は指摘しています。彼らの『火のように燃えていた』心、真理への渴望をイエスは知っておられたのです。

「あのイエス」が失望のどん底にいた自分たちの前に再び現れ、一緒にいたころのすべての言動の意味を教えてくださいました！そして今、自分たちと一緒にいらっしゃる！弟子たちの驚きと喜びはどんなに大きかったことでしょう。彼らはこの素晴らしい再会をいち早く仲間に知らせるために、旅の疲れもなんのその、真夜中にもかかわらず『すぐさま腰を上げ、そのままそこを発ち、』『イェルサレムに走り帰った』のでした。帰るとほかの弟子たちも集まっています、イエスが本当に復活したのだと話し合っていました。

さらにイエスは、前回読んだ『コリント I』15章にあったように、ケファ〔ペトロの別名〕に現れ、次に十二人に、さらに五百人以上の兄弟たちに一度に現れます。次いで彼はヤコブ<sup>⑤</sup>に、そしてすべての使徒たちに現れたといえます。弟子たちはもちろんのこと、多くの人々の前に姿を見せたのです。

【⑤】ヤコブ：『新約聖書』では複数のヤコブが出てきます。ここでは「主の兄弟」ヤコブ。イエスの弟。「えっ、イエスに弟妹たちがいたの？」とお思いの方もいらっしゃるでしょう。これはプロテスタント諸派等の解釈です。イエスが長男であれば、その下に最低6人の兄弟姉妹がいたこととなります(『マルコ』6-3参照)。

カトリック教会ではイエスの「兄弟たち」とは、血のつながった厳密な意味での兄弟または義兄弟を指すのではなく、ヘブライ語とアラム語には「いとこ」を意味する語がなかったので、ユダヤ人は親族または同胞たちを呼ぶのに「兄弟」を使いました。福音書記者もその慣習に従って「兄弟」という語をイエスの親族に対して用いているとします(フランシスコ会訳『聖書』の中の『マタイ』p.37の④より抜粋)。また、マリアの「永遠の処女性」の教義からしても、イエス以外の子は認められません。

イエスと弟子たちの出会いについてすべてはご紹介できませんので、四福音書の中での主な箇所を書いておきます。ぜひ聖書でご確認ください。

【マタイ】28章1~10、16~20 【マルコ】16章9~12、14~18 【ルカ】24章13~35、36~49

【ヨハネ】20章11~18、19~23、26~29、21章1~23 など。

## 〈原始キリスト教団〉の成立

復活のイエスとの出会いを経験した弟子たちは、次々にエルサレムに戻ってきます。そして彼らは「教会」(ギリシャ語で「エクレシア」=人々の集まり)を持ちます。そこには一般の信徒たちもたくさん加わりました。その中で指導的立場に立ったのはもちろん「十二使徒」たちでした。「十二人」といっても、イエスを裏切ったユダは自殺した(『マタイ』27.3-5)か、事故死(『使徒言行録』1.16-18)したので、その代わりにマティアという者を選びました(同書 1.21-26)。ここに〈十二使徒体制〉が整ったわけです。「十二」という数字は、一年は12か月、イスラエル民族は12部族から成り立っていたことなどから、古代ユダヤでは象徴的な意味を持つ「完全数」と見なされ民族が完全な状態

にあることを表す数です。

## 「謎」を解く〈鍵〉はどこに？

第47回で弟子たちには解かねばならない「謎」があったことを書きました。「イエスはなぜ十字架上の死をとげなければならなかったか？」「なぜその時、神は沈黙していらしたのか？」。その謎を解く〈鍵〉を見つけるために彼らはどうしたのでしょうか。遠藤周作氏は『キリストの誕生』の中で、弟子たちは次のように考えたのではないかと書いています。

(1) 生きていたときのイエスの言葉やその教えの中に鍵があるはずだ。

イエスと共に生活していたとき、「あの人はこう言われた …」「あのとき、ああいう行動をとった …」と、イエスの言動を思い出し、その意味について話し合ったにちがいない。

(2) 先祖伝来のユダヤ教の聖典の中に書かれてはいないか。

彼らはユダヤ民族が信じてきた「神(ヤハウェ)」と、その神が預言者に托された「御言葉」<sup>みことば</sup>を熱烈に信じていた。この聖典の中にイエスの受難とその深い意味がかくされてはいないか。

弟子たちはイエスと過ごした日々の経験を顧みるとともに、信仰の土台であるユダヤ教の聖典をもう一度読みなおすことを始めたのです。そしてついに、『イザヤ書』の中にその〈鍵〉を発見します。

## 『イザヤ書』とは

『旧約聖書』には「預言書」と呼ばれるものが19巻あり、その中で『イザヤ書』、『エレミア書』、『エゼキエル書』は「三大預言書」といわれます。その中の一つ、『イザヤ書』の中に弟子たちを覚醒させたものがあったのです。

『イザヤ書』は全66章からなる書物で、三つの部分から成り立っています。

＋1～39章：紀元前8世紀の預言者イザヤの言葉を基本として書かれている。ユダヤ民族の罪の弾劾と悔い改めの勧め、メシアの到来などが語られている。

＋40～55章：紀元前6世紀の無名の預言者の言葉が中心。『第二イザヤ』と呼ばれる。罪の赦<sup>ゆる</sup>しとバビロン捕囚からの解放を預言。また、このあとお読みいただく52～53章において、〈苦難の僕〉<sup>しもべ</sup>の贖罪<sup>しよくさい</sup>による救済を告知。

＋56～66章：紀元前6～5世紀の預言者(名前不明)によるもので『第三イザヤ』と呼ばれる。捕囚解放後の救済と審判の交錯した多様な預言の集成。

この中でも『第二イザヤ』と呼ばれるものは、「新・出エジプト記」として語られ、この書の中核をなすといわれます。

今回は、『イザヤ書』52～53章を読んでいきたいと思います。

【引用・参考にした書籍】 ・大貫 隆 『イエスという経験』 ・山我哲雄 『キリスト教入門』

・山浦玄嗣 『ふるさとのイエス』 / 『ガリラヤのイエシュ』

・『岩波 キリスト教辞典』 ・遠藤周作 『キリストの誕生』 (新潮文庫、1982)

・百瀬文晃 『キリスト教の本質と展開 キリスト教概説[Ⅱ]』

・大島 力 『イザヤ書』 (『新共同訳 旧約聖書 略解』より、日本基督教団出版局、2005)

・新約聖書翻訳委員会 訳 『新約聖書』 ・兩宮 慧 『図解雑学 旧約聖書』 (ナツメ社、2014)

・フランシスコ会聖書研究所 注訳 『聖書 原文校訂による口語訳』 (サンパウロ、2011)